

令和 2 年 5 月 26 日現在

機関番号：34316
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：16K02122
研究課題名（和文）フェミニズムの問題圏から見た批判理論の可能性

研究課題名（英文）Feminist Interpretations of Critical Theory

研究代表者

入谷 秀一（Nyuya, Shuichi）

龍谷大学・文学部・准教授

研究者番号：00580656

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：批判理論、あるいはフランクフルト学派という名で知られるドイツの哲学者・知識人グループの活動を、フェミニズムというフィールドから論ずる動向は、欧米では盛んであるが、日本では殆ど注目されていない。本研究はこの動向を包括的に調査し、論争の見取り図を作成するのみならず、批判理論の弱点やアクチュアリティを析出した。プロジェクトが明らかにしたのは、批判理論とフェミニズム理論との生産的な交わりは次の三点に集約しうる、ということである。つまりそれは、精神分析的アプローチ、身体性への着目、そして語りの実践である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ハーバーマス以降の批判理論の流れにおいては、討議の手続きや合意のための状況整理など、形式的な議論が先行し、批判理論が当初もっていた社会批判という実質が失われつつある。他方で主に（ドイツではなく）英米圏では、主としてフェミニストやフェミニスト系の精神分析家によって、批判理論の生産的な継承が試みられている。彼女らは、まさに社会を生きる個人の痛みやその（身体的な）表現につきそう、というアドルノ以来の課題を、フェミニストならではの視点から捉えなおそうとしている。本プロジェクトはこうした試みをマッピングすることで、見取り図が不透明になりつつある批判理論の未来に、一定の見通しを付与するものである。

研究成果の概要（英文）：In Europe and the United States, there is a trend of discussing the activities of a German philosopher and intellectual group known as the critical theory or the Frankfurt School from the field of feminism. But it has received little attention in Japan. This study comprehensively investigated this trend and created a controversial sketch. In addition, the weaknesses and the actuality of the critical theory were also identified. As a result, the project revealed that the productive interaction between the critical theory and the feminist theory could be summarized in the following three points. In short, it is a psychoanalytic approach, a focus on physicality, and the practice of narrative.

研究分野：哲学・ドイツ思想史

キーワード：批判理論 フェミニズム アドルノ セクシャリティ ナラティブ 身体性 エロス

1. 研究開始当初の背景

いわゆる批判理論 = フランクフルト学派の第一世代 (Th・アドルノや M・ホルクハイマー、H・マルクーゼらがその代表) は、社会批判が取り上げるべきテーマとして、セクシャリティの社会的様相に早くから注目していた。フロイトに直接影響を受けた彼らの世代にとってそれは、西洋の伝統的な合理主義が抑圧してきた事象でもあった。「身体性へ」という題目に集約しうるこの動きは周知のように、戦後フランスのいわゆるポストモダニストたちによって本格的に展開された。その中で、生(性)の制度化という社会現象について、最も徹底的に分析したのが M・フーコーであったのは言うまでもない。他方で、第一世代以降のフランクフルト学派 (その代表者はアドルノの助手でもあった J・ハーバーマス) は、フーコーや J・デリダに見られる合理主義批判に対しては、極めて冷淡な姿勢を取り続けた。ハーバーマスの弟子であり、第三世代の代表者と目される A・ホネットもまた、かつて師の研究に「社会的行為の身体的 肉体的次元」が欠けていることを指摘していたにもかかわらず (Honneth, *Kritik der Macht*, 1985) 身体について多くを語ろうとしない。フェミニストである政治哲学者 N・フレイザーは、ハーバーマスの合意形成モデルへのこだわりがホネットにも存在する、と指摘している (Fraser/Honneth, *Umverteilung oder Anerkennung?*, 2003)。

要するに戦後のフランクフルト学派は、多かれ少なかれ、合理主義を脅かす自然の力 (と、その最も身近な現れでもある、セクシャルな身体性の問題) から目を逸らしてきたのである。しかし近年、特にアメリカのフェミニストたちによる第一世代の再評価に顕著のように、こうした構図に揺さぶりをかける動きが顕在化してきている。さらに、他ならぬドイツにおいて、様々な制度にさらされた現代人の身体を社会哲学的に分析する動きが若手研究者やフェミニストの側から起きている。しかしこうした動きは日本では、ほとんど注目されていない。公共圏の合意形成を巡るハーバーマスやホネットの議論が継続的に紹介される一方で、そこに見え隠れするジェンダー・バイアスが問題になることもないのである。

2. 研究の目的

上述したように、批判理論の第一世代が欧米のフェミニストに与えた理論的インパクトは、日本では顧みられることが殆どない。とはいえ、苦悩や痛みでさえ あるいはそうしたものであればなおさら メディアを通じて商品として消費され、ポルノとして享楽される時代であって、いわば「公的に覗かれる」身体現象が喫緊の社会批判的な分析課題であることは、これまた言うまでもない。本研究はこうした問題に対抗しうる、身体論としての批判理論の枠組みを浮かび上がらせる。それは、実践から身を引き、議論のための議論、形式論や手続き論に終始する (と、たいていの場合見なされがちな) 批判理論のイメージを刷新し、アクチュアルでグローバルな思想的可能性としてこれを捉え直すために必要不可欠な試みなのである。

3. 研究の方法

- ・フェミニズム的問題を巡る第一世代に共通の問題意識 (特に家族論、権威論、文化産業論、大衆社会論という観点から) を明らかにする。特に注目したのは、もはや日本で論じられることが稀になったフロムやマルクーゼのテキストである。
- ・特に『啓蒙の弁証法』やアドルノの論考を振り返り、アドルノの二面性 (フェミニストとして、また同時に、異性愛主義者・男性原理主義者としてみなされるという) を際立たせ、問題点を整理した。フェミニズム理論が批判理論に見せる曖昧な評価は、結局のところ、アドルノをはじめとする第一世代の曖昧さに淵源する、ということが明らかになる。
- ・さらに、いわゆる 68 世代の理論的バックボーンにもなったというマルクーゼや R・ライヒエのエロス論、そしてそれらがフェミニズム運動に与えたインパクトについても、あわせて追跡調査した。
- ・D・コーネルやフレイザー、J・パトラー、J・ベンジャミンのようなピック・ネームのみなら

ず、J・ディーン、M・カプリといった英米のフェミニストの議論（それはハーバースが放棄した精神分析アプローチを用いて、まさにハーバース風の普遍主義的アプローチに通底する男性主義を糾弾している）から、批判理論をまさに批判的に継承してゆくためのポイントを析出した。

- ・2000年にフランクフルトに設立された「女性および性関係の研究のためのコーネリア・ゲテ・センター」のメンバー、その中でも特に、かつてアドルノの学生でもあったR・ベッカー＝シュミット教授らとの学术交流を深め、女性運動、性現象、家族論などに関するアクチュアルな議論を吸収すると同時に、ドイツ国内における批判理論とフェミニズム運動との関係史、その戦後史を振り返った。

4. 研究成果

2016年度

提出済みの研究実施計画に従い、本年度は、現代のフェミニズムの文脈における批判理論（特にアドルノ）の位置価値を確認した。さらに、第一世代が1930年代に行ったフェミニズム的議論の掘り起しに従事した。具体的には、8月に開催された批判理論研究会第30回研究例会（大阪大学）において「フェミニストはアドルノをどう読んだか ドゥルシラ・コーネルへのインタビュー」と銘打って、英語圏を代表するフェミニストであるコーネルのインタビュー（Renée Heberle(ed.), *Feminist Interpretations of Adorno*, 2006に収録）を全訳し、メンバーと活発な議論を行った。さらに、様々な国内学会への参加を通して、現代のフェミニズム運動や性の問題に対する知見を深め、広くフェミニズム一般の問題圏にアプローチするためのへのネットワーク作りに従事した（代表的なものでは、日本倫理学会第67回大会（早稲田大学）ワークショップ「性差別と倫理」、そして立命館大学生存学研究センター主催、フェミニズム研究会第8回（2016年度・第3回）公開研究会「性における差別と支配：ヴァルネラビリティをめぐる」など）。また、当該年度の5月には共著『21世紀の哲学をひらく 現代思想の最前線への招待』（ミネルヴァ書房）が出版され、拙論がその第8章「批判理論 アドルノ、ホネット、そしてフランクフルト学派の新世代たち」として掲載された。これは、論考こそ前年度に用意されたものであったが、1930年代の批判理論の活動内容を俯瞰する意味で、本プロジェクトにとって極めて有効な下図を用意するものとなった。

2017年度

研究実施計画に従い、本年度は第一世代、特にアドルノにおけるセクシャリティの問題を検討するとともに、学派全体の思想的変遷における心理学・精神分析の位置価値の分析を行った。アドルノらにとって心理学は、特にフロイトがそうであったように、リビドーに代表される人間の自然本性の価値評価の問題と不可分であったが、ピアジェやコールバーグらによって開拓された発達心理学へと接近した第二世代にとって、リビドーの問題は背後に退き、代わってコミュニケーション行為の妥当性が議論の中心を占めるようになる。リビドーから言語へとパラダイム・シフトが起こり、心理学の「脱自然化」が遂行された、とも表現できるが、その担い手は言うまでもなくハーバースである。以上のような文脈を研究論文にまとめたものが「ハーバースと批判理論」だが、これは加藤哲理・田村哲樹編『ハーバースを読む』、ナカニシヤ出版、第二部第6章として、2020年内に刊行されることが決定している。さらにアドルノ思想における女性的なものの影響を明らかにした論考として「女達の影、女という影 アドルノのセクシャリティを覗く(1)」(『龍谷紀要』第39巻第1号、龍谷大学編、65-79頁、2017年9月)が刊行された。また、戦後から現代にいたるフランクフルト学派の思想動向をフォローする目的で、研究者自身がメンバーとして属している批判的社会理論研究会に参加し（第32回は2017年9月9日-10日に東北学院大学で、第33回は2018年3月3日-4日に大阪大学で開催）、資料収集と議論を行った。

2018年

昨年度の研究成果の一つ(「ハーバースと批判理論」)によって、フランクフルト学派内においても、またその外部からの評価に関しても、フェミニズムの意味合いが異なることが示された。具体的には、生殖や家族、身体的な快楽といったテーマに第一世代が集中的に取り組んだのに対し、第二世代を代表するハーバースがこれらを殆ど無視しており、その普遍的かつ「男性的」な志向が第三世代のホネットなどにも影響を与えていることが示された。そしてこれと連動して、バトラーやコーネル、ディーンやフレーザーのような主だった英米圏のフェミニストが、ハーバースを批判するためにアドルノを持ち上げる、といった動きを展開していることも明らかになった。そこで今年度は、ある意味原点に立ち返り、そもそも第一世代が活躍した20世紀中盤において、フェミニズムはどのような文脈で、またどういう「経験」として当事者たちに自覚されたかを考察し、それによってアドルノのいう「苦悩の表現」が、個人的かつ政治的な身体経験として社会に共有されてゆくプロセスを整理した。その研究成果は、この年の秋に刊行された拙著『バイオグラフィーの哲学 「私」という制度、そして愛』(ナカニシヤ出版、306ページ)に組み込まれた。またこの本を巡っては、シンポジウム「私」の変容、愛の変容 入谷秀一『バイオグラフィーの哲学』合評会」が國學院大學で2019年2月に開催され、フェミニズム研究者のみならず、批判理論の専門家からも好評と実りある批判を頂いた。

2019年度

プロジェクトの推移とともに明らかになったのは、フェミニズムを単なる「運動」ではなく「理論」として捉える上で、注目すべき観点は三つに集約できる、ということだった。それは精神分析的アプローチ、身体性への着目、そして語りの実践である。拙著『バイオグラフィーの哲学』はこの観点を20世紀の当事者たちが文字通り、どのように血肉化したかという経緯を振り返る試みであった。さらに同年、この三つの観点をさらに物語論として発展させた論考「理想的読者について」(『龍谷紀要』第41巻第1号、2019年9月)が公刊された。また、当該プロジェクトの二年目に出されていた論考「女達の影、女という影 アドルノのセクシャリティを覗く(1)」の続編が同年度、「エロスと弁証法 アドルノのセクシャリティを覗く(2)」(『龍谷哲学論集』第34号、2020年1月)として公刊された。さらに、フェミニズム的な語りの意義を文学や現象学の立場からも掘り下げる試みとして、「意味が立ち上がる時 物語論の諸相」という題目のもと、第41回日本現象学会シンポジウム「文学を通じての哲学 現象学の可能性を探る」(岡山大学、2019年11月23日)において口頭発表を行った。また、長らく果たせずにいた国際交流については、2019年9月12日から三日間、オルデンプルク大学(ドイツ)で開催された国際学会「3rd Istanbul-Oldenburg Critical Theory Conference: History, Progress, Critique」に参加し、発表こそ行わなかったが、人的交流と動向調査の両面において、実りある成果を得た。

今後の展望

研究プロジェクト期間中に、ホネットがフランクフルト社会研究所の所長の任を退いた。フランクフルト大学の社会哲学講座にも、若手研究者(M. Saar)が着任し、批判理論は代替わりの時期を迎えている。考えてみれば、あらゆるものが流動化する21世紀を迎えて、我々はすでに20年になるのだ。哲学にしか論じられないこと、社会研究所にしかできない研究、ドイツでしか見られない生活様式などは、もはやないに等しい。では今後、社会批判は、その方法論にしる研究対象にしる、自身のアイデンティティをどこに求めるべきなのか。研究プロジェクトで得られた三つの観点をより精密かつ具体的に発展させる必要を感じつつも、他方で、批判とはそもそも、どういう実践かという根本的なテーマに立ち返る時期にきている、という思いも強くなっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 入谷秀一	4. 巻 第39巻第1号
2. 論文標題 女達の影、女という影 アドルノのセクシャリティを覗く(1)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 龍谷紀要	6. 最初と最後の頁 65-79頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 入谷秀一	4. 巻 第41巻第1号
2. 論文標題 理想的読者について a la Konstellation	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 龍谷紀要	6. 最初と最後の頁 45-60頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 入谷秀一	4. 巻 第34号
2. 論文標題 エロスと弁証法 アドルノのセクシャリティを覗く(2)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 龍谷哲学論集	6. 最初と最後の頁 53-72頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 入谷秀一	4. 巻 第69集
2. 論文標題 アドルノの異性愛主義を再考する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 倫理学年報	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 入谷秀一
2. 発表標題 「私」の変容、愛の変容
3. 学会等名 シンポジウム「「私」の変容、愛の変容 入谷秀一『バイオグラフィーの哲学』合評会」（國學院大學）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 入谷秀一
2. 発表標題 意味が立ち上がるとき 物語論の諸相
3. 学会等名 第41回日本現象学会シンポジウム「文学を通じての哲学 現象学の可能性を探る」（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 入谷 秀一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 306
3. 書名 バイオグラフィーの哲学 「私」という制度、そして愛	

1. 著者名 入谷秀一ほか12名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 未定
3. 書名 ハーバーマスを読む	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----